

石の花 伊武トーマ

しわくちやな手だけが
空気に触れ得る。
そのまなざしは光を追
影をきりとり――
褪えないほど
顕在化するものたちの
質量を測っている。

彼は
時間そのものと対峙している。

きりだされたままの
大理石を前に

彼は

時に蹂躪され

封印されている花を

目の前に転がる大理石から

解き放とうとしている。

風が吹いた。

彼が

しわくちやな手を

大理石にかざすと――

石の花は咲き

神話の頁はふたたびひらかれ

アフロディテは舞い降りる：

遙か時を超え。

アフリカ 米山浩平

灰に代わり
暗箱のなかで、ひろがる点
というよりは染み
あるいは陣、
灼熱にうながされ
燃えつきた棺を払いのけ
真夏の焼き場を脅かす
おまえが目醒める

斜めに傾きあげた寺院
口語で読みあげられた経文
むらさきの僧侶は棄教し
酒瓶を振りまわしながら

おまえの跡を追う葬列の波にまぎれる

ふたつの麒麟の首の交差から昇った朝日が
毛むくじやらの猿の足に引きずり降ろされる
山伏が角笛をたたむ
龍は尾を叩きつけ

巨人の顔から爪先をたどる旅は続いた
おまえは黒こげの肌を恥じる火葬場の取り換え児
アジアからアフリカへ
人々の就寝中に予告なく降臨する教祖
原始の神話を斥ける野生的思考
かぞえられる装飾

かぞえられるだけの宗教的様式
それらは混ざりあい飛沫をあげて逆回転した
焼き場の赤よりは暑く
濃密な単数の色彩の洞に眩められる

ひたすら横断する酔狂の徒を引き連れて
通り過ぎた道には肉食らう草木の繁茂
枝にぶらさがる、

たやすく横にずれる山
裁断されるための海が出口をつくむ
ありうべき信仰が
ゆるやかに凡庸のシステムへなだれ落ち
旅は継続を余儀なくされる

いもうと 坂多堂子

いもうとは洋服がま
紺のワンピースを縫ってあげるよと
わたしはちっともほしくないなんていつてないのに
サージの生地を買ってきて
ジョキジョキはさみをいれている
ジョキジョキいう音を聞きながら

紺色はすきじゃないんだけど
なんていえずに
サバの味噌煮もすきじゃないといえなくて
いもうとの分まで食べてしまおう

いもうとは袖の部分にはさみをいれている
袖がどんどんのびていくので

いつまでもジョキジョキジョキジョキがおわらない
座敷をぬけて
縁側を出ていつて
袖口がこすれるよ

ああ わたしのワンピース

いもうとはいいつも強引だ
ずっと速くまでいつて にこつとわらう

虫を知らせる 海埜今日子

むしのいきで、ばしよを、じかんだ。よきつては、いき
せきつて、せいをくきょう。そんなふうしよが、きし
のむこうから、きこえたの。いきまだつたのかもしれない
まけん。こたえをうしなう、へんじをだたため、おくつ
たくちづけが、かわもにそよぐ。いわく、きつと、むし
かえしては、あなた、たましいを、せびるのです。いつ
か、よいへんじを、おきかせくださいいねえ。
しずけさ、かたちばかり、ちぎつては、ほうります。
ちいとも、うるさくなんか、ええ。かぜのたよりに、べ
つじんたち、はいたつされず、やりきれなくなつて。

むしのことは、だれを、こわくへ。ながれては、せす
じあたりで、かきむしる。ひらけなかつた、てがみなら、
こどもも、ちつともかきました。きしよいんで、とい
かけては、あなた、きつと、かたむけたの。いないことに、
わずかばかり、めでるきより、ぬるいとうかんが、あお
くようにみつめたから、かたをふうしよへ。つたない
へんじ、なにとぞ、ゆるしてくださいいねえ。
よるのむじが、ながれをかたちづくるのかもしれない。
くちびるを、こわすまうにして、だれかを、きつとなき
むしです。なんども、たくさん。そんな、みうしなつた、
ことば、こどもがわらう、みたいに、いんくにしてよ。

むしのしらせを、わたしへ、さける。かぜが、そつと、
たわむれたから、つかんだふるえて、うしなつて、と、
だれへ、なんと、よみがえるのだろうか。はもん、きつ
と、にじむから、よむことが、なんとか。ああ、こども
なら、あしたも、おとされたを、もめたのに。むしむし
とする、けはいが、さげびで、たくさんです。
よいのうちにあえますか。へんじは、かこども、いいか
ら、くださいいね。かわもにうづる、きしべたち、しらない
いもじ、ざわめくので、つれないにおいも、おうせです。
ああ、まだ、どこですか。ここなら、へんしんを、きつ
と、ちゅうとで、さぐりあうよ。

むしのもじで、よきつては、いきをうしない、なんど
か、かぜをもどります。そんなそうにゆうが、あそこを
ながれ、どこかをぬらし、むしばむよう、よみあげられ
たいんく、なせくうはくいきこえの？ なぞるように、
けしんのはて、きしのごちらで、たむけたなら、くち
もひらく、と、かわけばいい。

へんじ、きつと、なんども、だいていたんですねえ。に
ぎやかさが、ちいとも、じかんをうめません。そうだ、
なぞるように、いまから、いんく、かいにゆうこう。かな
しいわらい、とどけにあがるよ、たまにはね。



再会 神泉 薫

鬱蒼と生い茂る草むらに置かれた私を
不吉な死の象徴と見なすのは世の常で
ふくよかな肉を宿していた時代の煙ひやかな日々を
昏い眼孔の奥に見出すものは少ないが
あるとき一匹の蛇が東の果てからやってきて
今はもうすつきりとしたがらみから私の内部へ
ふいに右目から入り込んで、左目から出て行った
春の蜜の香りをその肢体に抱えた羽あるものの到来は
しばし退屈な今の時から私を救い上げてくれた
誰も好き好んでしやれこべとなる訳はない
産声を上げたが最後、生の結末はみな等しくこの姿
静かに朽て土となるまで、いくつもの四季をやり過こす
だが、しやれこべにもひとつ、優れた点がある
それは、すこぶる風通しが良いこと

ときに生は、正し過ぎる太陽に照らされてまぶしすぎるものだ
ひんやりと涼を求める。休息の場にはもつてこい
私は、川のそばに立つ一つの建物、丸みを帯びた白い宮殿
私の空洞を周遊する小さな生き物の活気を待ち望むことも
第二の人生

森の外れから
カタカタとリズムカクに陽気な歯を鳴らして呼ぼう
蛇さん、蛇さん、こちへおいで
現実から転げ落ちた夢の中で
蛇に転化した懐かしい友の魂が一つの旅を始める所

左目の王 池田 康

左目の王が逝く
もうとうに異界に入っていた右目を追って
今朝、川を渡り
左目で見えていた世界は
揺れて消えた

死者の傍
もつともゆつくり巻きながら
闇の眼窩へとすべり込むややこの歌
横たわる王の両眼は閉じて
時間に礎をかける

かつて王を乗せて川を漕った
舟は流れ去る
左目が描いた絵
舟が描いた絵
左目が撮った映像をのせて

死と生と接する午前三時
右目が闇から現れ
王を見つめる
眠ったまま王は立ち上がり
右目についていく
闇の奥へ

左目は舟とともに
王は右目とともに
去り
すべて去り
川が残る

左目が見てきた世界
それは右目を探するための地図
右目を見つけたのか
右目が見つけたのか
王は左目の地図を捨てて
影の合羽をはおり

左目の王は還らない
反転して
右目の王となる

(ひとしきり青空の空耳に飛び込む……)

たなかあきみつ

ひとしきり青空の空耳に飛び込む
ともすれば空前の絵空事、思わず知らず空言にもやたら空際がある
青空の断片が顆粒のベッパいとどこからでも
じやれあつて浮遊する灰色のクリップスとあわや
途中で議論のジッパーを開閉する
群青による密猟の闇に乱入する現役の
狼たちの獲物の血でちくじ研がれた歯列を前にして、
電波という肉蝨はどこにたかる？
この五月のTV画面に奇しくも晴天のラケットが切りだす
チキータバナナの弾道が瞬時に変わった

使い古しの泡がまたぞろ弾けてひとけない広場が砂埃を舞い上げる
皇帝ベンギンの記憶に踏記されたボーバの箱の箱へ急がなくなっちゃ
ともかくサハラ砂漠の北縁でタクツーのように採取されたとしても
アンモナイトの猫眼はむ銀色のアポストロフは底光りする
指先の緩傾斜で磨き抜かれたこと

肉眼ではろくに布置を見渡せない埃の密着は
たとえば《海猫三羽羽》の密集的乱舞に匹敵する
緑がおのずからきつクギヤザリして乾燥しはじめた花卉は
腐臭のすみやかな脱臭に向けて空位に向けて
やおら空きビンに荷葉の足を突きさす

雲への、雲行きへの何度でもグッドバイだ鳥打ち帽を左前方に
晩年のある日、写真の笠智衆はのぼり坂にさしかかったところで
パイパイとよれよれの帽子を差し上げつつ晩夏に合図する
これまでの思いの丈を鳥の羽ばたきのように空気に叩きつけ
彼はカメラアイにおのれの背中ばかり見せつけるパイパイと

アンチエイジングの醜態さを症例的に累乗し
キツオンの群れが思わず乱歩的に肌荒れ脱輪し
だからこそ無色を含め色彩のかけらがとりどり浮遊する
宇宙空間のデブリさながら刷り込まれたチエコ語 bathin の
かけらを手始めにメタリックな暗緑の濃淡をじやらじゃら亀座りだ
紙のレミング、紙の耳、巻頭のハミングだからこそ

《……タンボールの仮面は
保水しない――水は

眼から流れだす》とは乙なリッオスよ、赤レンガ色の PAPIERS
9P を水と水、もつばら紙の耳袋寄せあつてますは参照のこと

(補註) ボーパルヴァス・コボバ、二十世紀のセルビア詩人(一九三二
九二)。代表作は《小さな想いほか。



要らねえだろ

